
IS－騎士と魔王－

村正

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS-騎士と魔王

【Zコード】

Z7520X

【作者名】

村正

【あらすじ】

女にしか使えないこの出来ないISを動かしてしまった、織斑一夏と双子の弟の一樹の織斑兄弟。

世界初の男性操縦者となり、IS学園に入学することになつた織斑兄弟に待つてはいるものは……。

プロローグ（前書き）

今更ですが書きたい衝動にかられ、書き始めました。
何とぞよろしくお願いします。

プロローグ

「おい、一夏」

俺は今、目の前にいる兄を全力で睨んでいる最中だ。そうでもしておかないと俺の気が済まない。

本当はボコボコにしてやりたい。

「……」

「おい、一夏。聞いてんのか？」

当の一夏は、俺の方を振り向こうとはしない。

俺と田を合わせたら負けとか思つてんじゃねえだろくな

「だ、大丈夫だ。俺に任せろ！」

「何が任せろだ！ テメエに任せたから、こうやって現在進行中で迷つてんだろうが！」

俺と一夏は私立藍越学園の受験のため多目的ホールに来てるんだが、さつきも行つた通り絶賛迷つている。

まあ、初めて来たから道が分からぬといつのは当たり前だけど、こうも綺麗に迷うとはな。

人に聞こつにも、辺りには誰もいねえし。どうしたもんか。

「えーと……あれ？ これ、どうやって一階に行くんだ？」

「ちょっと待て！ 今、聞き捨てならないこと聞いたぞ！ 今のは完全に迷つている、つて認めたようなもんだろ！」

ツツツツを入れても、一夏の野郎はスルー。

はつ倒してもいいよな。

「ええい、次に見つけたドアを開けるぞ、俺は。それでだいたい正解なんだ」

「は？」

「うとうと血迷つたらしく。完全にパークつてやがる。

」のままだと俺達は受験できなくて、藍越学園には不合格つてことになりそうだ。

やうなつた時、」こいつを慰めるのは骨が折れそうだ気がする。

「……んなわけあるか。それで当たりだつたら、テメハのことを心の底から尊敬してやる」

「よし、言つたな。約束だぞ」

「ねつ、約束だ」

そんなことを話して歩いてくるとドアを発見。
それそのまま通り一夏は、本当にそのドアを開けた。

あんなことになるんだつたら、」の時意地でも」のバカを止めとわやみかつた。いや、マジで。
ま、後付けでしかねえんだがよ。

「」こんな感じかなあ？」

タイピングを止めてディスプレイを眺めながら、私は首を傾げる。

配分は問題ないと思うんだけど……どうなんだろ。
何か違和感がある気がしてならない。

特にこのシステムが。

やっぱり、これを入れたのが間違いだつたかな？ でもこれを持
載して、初めて動く機体だし。

「うーん……」この子は自分で完成させたかっただけで、しょうが
ないか。お兄ちゃんに聞いてみよう。」

やつ思つて部屋から出た時だつた。

お兄ちゃんの部屋から、大きな物音が聞こえてきた。

「お兄ちゃん！？」

「おー！ 紫ちゃん、ナイスタイミングだね！ これこれ！ 束ち
やんから聞いて、ボクでもビックリだよ！」

どうしたんだろう？ さつ思つて、お兄ちゃんの見てたディスプレ
イを覗いた。

そこに映つていたのは、幼なじみの似ていな双子だつた。

「一夏くんも一樹くんもす」いね。流石は千冬ちゃんの弟、つてこ
となのかな？ 紫ちゃんも、さつ思つよね？」

私は固まつたまま動けなかつた。

世界で初『IDS』を動かしたとして幼なじみが、織斑一夏と弟の
一樹が映つていたのだから。

「紫ちゃん、大丈夫？」

「え、あ、うん。大丈夫だよ」

完全に思考が止まつてた。ホントこの家族は、こりこりヒントで
もないなあ。

「それにしてもよかつたね
「何が？」

お兄ちゃんの言つてることが、一切わからなーい。

「また一樹くんと一緒に学校に通えるねえ
「え？」

この時の私には、お兄ちゃんの言つてることが全く分からなか
つた。
だって来年度から私が通つうことになるのは女子しかいない、HS
学園なんだから。

第一話

「全員揃つてますねー。それじゃあISHRはじめますよー」

黒板の前で微笑む女性。

教室に入ってきた時は、間違つて私服で登校してきた生徒かと思つた。

いや、マジで。

そしたら副担任だと聞いて、軽く驚いた。

人は見かけによらないとは、正にこのことだな。

まあ、なんことばざつでもいいんだよ。俺が文句言いたいのは、今のこの状況。

俺と一夏以外、女子だけつて教室。

あの受験日に一夏の野郎が開けたドアの中で、俺達は『IS』を動かしてしまつた。女しか動かすことができないはずのそれを。だから俺達はここに、IS学園に入学することになつちました。

「……くん。織斑一夏くんつ」

「は、はいっ！？」

完全に一杯一杯だな。まあ、この状況は精神的にくる。

「あっ、あの、お、大声出しちゃつてごめんなさい。お、起こつてる？ 起こつてるかな？ ゴメンね、ゴメンね！ でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まつて今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、『お』、『ゴメンね？』自己紹介してくれるかな？ だ、ダメかな？」

何で年下相手に、こんなに下手に出でられるんだ？ 俺なら立たせ

て、自己紹介させるぞ。

一夏もさつさと立つて、自己紹介すりやあいいのに。

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしくお願ひします」

一夏の自己紹介はそこで終わり。クラス中から視線が集まる。『もつと何か言え』と。

そりやそつだろ。一人しかいない男の内の一人の自己紹介だ。いろいろ聞きたいのは当たり前。

そんなことを考えると視線が。

一夏だ。

『助けてくれ』とアイコンタクト。それに対して俺は『テメエで考える』と返信。

お前のことまで知らねえよ。

すると一夏は幼なじみの篠ノ之箒と、天草紬に視線を向ける。姉の箒は外に顔を逸らし、紬は笑顔を返してくれるだけ。ありや、意味を理解してないな。

一夏の味方はいなくなつた。どうするんだ？

「以上です」

クラス中でずつこける音が。当たり前だな。

確か中学の時もこんなじやなかつたか。進歩無し。

まあ、俺も人のことは言えそうにない。だつて思いつかねえんだからよ。

パンツ！ 一夏がいきなり叩かれた。

「いつ――――！？」

あの完璧な叩き方。何か見覚えがある。つか、身に覚えがある。

今まで何度も何度も喰らつてゐるよつな……。

「……」

振り向いて見ると黒のスーツで身を包んだ、久しぶりに見る人物が。

「げえつ、関羽！？」

パンツ！

いや、違うだろ。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

関羽じゃない。鬼神だ。

パンツ！

「イテエ！」

「無礼なこと考へるからだ」

何で分かつたんだ？

謎だ。謎すぎる。といふか、何で姉さんがここにいるんだ？職業不詳で月一、二回しか帰つてこない姉さんが。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

何だ今の声？ 千冬姉のあんな優しい声を、俺も一夏も聞いたことがない。

あの人からあんな声が出るのか。ビックリだ。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言つことによく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠15才を16才まで鍛え抜くことだ。逆らつてもいいが、私の言つことは聞け。いいな」

無茶苦茶な。

誰もが引いてるかと思ったら、黄色い声援が響いた。

「キヤ————！ 千冬様、本物の千冬様よ！」「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！ 北九州から！」

耳が潰れる……本当に人間の声援か？

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

この言葉、本気で言つてる。実弟の俺が言つんだから間違いない。少しくらい喜べよ、姉さん。

そんなことは絶対に無さそうだけど。

「きやあああああ！ お姉様！ もつと叱つて！ 鳴つて！」「でも時には優しくして！」「そしてつけあがらないよつと躰してー！」

このわずかな時間で分かつたこと。それは、このクラスにはMが多いこと。

「で？ 挨拶も満足にできんのか、お前は」「いや、千冬姉、俺は——」

「パンツ！ 一夏の脳細胞は、今日一日でどれだけ死ぬんだろうか？」

ちなみに今で一万五千個。

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

「」のやり取りがちとまづかった。つまり姉弟なのがバレた。

「え……？ 織斑君つて、あの千冬様の弟……？」
「それじゃあ、男で『I S』が使えるつていうのも、それが関係して……」

「ああつ、いいなあつ。代わってほしいなあつ」「最後のはスルーだな。

「織斑弟、次はお前だ。さつあと血口紹介しろ」

「はいはい」

「はいは一度でいい」

「今だ！」

タイミングよく避けたら出席簿は空振り。

「ゴンツ！」

代わりに拳が降つてきた。
容赦ねえの。

「つ——あー、織斑一樹。そこにいる一夏の双子の弟だ。似てねえのは一卵性だからだな。まあ、一年間よろしく頼むわ」

一夏の時みたいになるかと思ったけど、ここで運は俺に味方した。
何かというとチャイムがなった。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君にはこれからEISの基礎知識を半月で覚えてもらおう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ！」

また無茶苦茶だ。すっげえ暴君。

一夏、関羽は間違い。こりや曹操だ。
パンツ！

「痛いっ」

「余計なことを考えるからだ」

これで俺の脳細胞も一万五千個死んだ。姉さんは俺達をバカにしたいんじやねえのか？

そんなことを思う俺だった。

「あー……」

一時間目が終わり、一夏の野郎は唸ついていた。

理由は聞かなくてもわかる。この雰囲気がダメなんだろう。

俺達を見るために教室の外には他のクラス生徒に、一二、三年が詰めかけてる。

何で俺達が、本に初めて来たパンダみたいな

状況になっているのかというとEISが原因だ。

このI.S学園は俺達が入つてくるまでは、世界中の箱入り娘だったりお嬢様ばかりの女子率100%の学校。

しかも世の中はI.Sで『女』偉いなんて、バカらしい構図が浸透。女尊男卑なんて社会が完成。

そんな中に対等な立場の『男』が現れてみる。興味が湧かないわけがないだろ。

しかもだ。元日本代表で全国の女子の憧れ、織斑千冬の弟というプロフィールまでつくと、そりやややこしくもなる。俺はあまり気にしないようにしてるが、さすがになあと思つことはある。

「……ちょっとといいか？」

「え？」

「んあ？」

気づけば俺達、正確には一夏の前に六年ぶりの再会になる筈がいた。

そして俺の目の前には紺が。こいつとは一年ぶりか。

筈の方は一夏だな。

それは隣のバカもさすがに分かつたらしく、

「廊下でいいか？」

筈と共に教室から出ていった。
さて残つたのは俺と紺。

「久しぶりだね、一樹」

「久しぶりだな」

周りから出遅れた、なんて空気が流れるがそりやあ当たり前だな。

「こつとは幼なじみなんだから。

「変わらねえのな、お前」

「そりかな?」

「ああ全然だ。というか、この一周年してたんだ?」

「お兄ちゃんの所でテスト・パイロットをやってたんの」

「こいつのか?」

「うん。で、この子がその時お兄ちゃんに作ってたんだもんだよ」

と黙つて紺が指差したのは、ヘアゴムの飾り。

「こいつの子?」

「これね、私の専用機なんだ」

「…………マジで」

「うん、マジで」

「こいつの兄、天草暦さんならそれくらい出来そうだな。
幕の姉の束さんほどじゃないが、かなり頭がいい。束さんが世界
一位なら、暦さんは世界一位だ。」

「だから私はお兄ちゃんが社長の天草重工の所属、つてことになつ
てるんだよ」

「そりかな?」

まあそりかな?

天草重工つてこいつのは、日本に住んでる奴なら誰でも知つてる大
手企業。

こいつを扱つよになつたのは4、5年前だったと思つ。

つまり暦さんはこの短期間で工事を完成させ、紺の専用機まで作

り上げたといつゝと。Hは初心者の俺でも「こと」は聞こえは分かる。

「また今度、この子を見せてあげるね」
「なら楽しみにしてく

キーンゴーンカーンゴーン。

ちゅうじょくよくチャイムが鳴り、第三一夏も帰ってきた。

「それじゃまたね

「ああ

パンツ！

「ひとつと席に着け、織斑兄

「……」J指導ありがとひりやれこめく

半日で二万個。

ハイペースすき。

今日一日で一夏の脳細胞は何個死んだらいいな。
今度紹と賭けてみるか。

第一話

「―――であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要があり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によつて罰せられ―――」

「フム、分からん。

一応教科書を眺めたけど、一気に睡魔が襲つてきた。つまり、今俺は眠たくてしようがない。

んな」とより、この状況をどうするかだ。他の女子は分かつてんだろうな。

さて、一夏は……同じ状況か。よし仲間だ！

「一夏くん、一樹くん、何かわからないところがありますか？」

出来れば空氣を読んでほしかつた。何でこの人はこのタイミングで訊いてくる？

「あ、えっと……」

いや教科書もう一回見たつて、わからない物はわからないんだ。意味がないだろ。

「わからないところがあつたら訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

それを聞いたこいつは何を思つたんだろうな、

「先生―」

「はい、一夏くん！」

「ほんと全部わかりません」

「え……。ぜ、全部、ですか……？」

一瞬で先生の顔が引きつった。あー、これは先生も予想斜め上だつたらしい。

……よし、追い込んでみよう。

「先生」

「はい、一樹くん」

「俺も全部わかんねえっす」

さらに引きつった。

ヤバい。この人楽しい。

「え、えつと……一人以外で今の段階でわからないっていう人はどれくらいますか？」

その質問は意味ないだろう、先生。女子は入学前から勉強しているんだからよ。

シーン……。

ほら、誰も手を挙げない。

「……お前たち、入学前の参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

「一度読んで眠くなつて、それ以来呼んでない」

パンツ！

ゴツ！

俺だけ拳つておかしくね？

「必読と書いてあつただろ？が馬鹿者共。あとで再発行してやるから一週間以内に覚える。いいな」

「い、いや、一週間での分厚さはちょっと……」

「無理だろ……」

「やれと言つていい」

「「……はー。やります」」

「これ以上逆らつたら殺されてたんじゃねえかな？ それくらいの威圧感が今の瞳にこもつてた。

「しょうがない。まともに授業を聞いて、ちゃんと覚えるか。これ以上殴られるのは避けたいし。

授業が終わり、今は休み時間。俺も一夏も疲れ切っていた。主に精神的に。

「どうする、一樹？」

「まあ一週間じゃ、かなり厳しいだろうな」

「だよなあ

さつき一夏も言つてたが、あれの暑さは電話帳レベル。一週間で読破し、内容を覚えろなんて拷問でしかねえ。

「ま、簞か紬にでも……」

「ちょっとよろしくて？」

「よくない、帰れ。だから、簞か紬に聞いたらいんじゃねえか？」

「一樹。さすがにそれは……」

一夏に言われそつちを見れば、知らない金髪がいた。

「何だ？」

「何ですの、あなたは！？ わたくしが話しかけていますのよ！」

それ相応の態度がありますでしょうー。」

「いや。テメーのことなんぞ、これっぽっちも知らねえから」

まつたくと言つていいほど興味がないから、自己紹介の時も名前を記憶していない。

「わたくしを知らない？」のセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを…？」

つるせえ。

黙らせていいか？ そんなことを、アイコンタクトで一夏に聞いたが、

「し、質問いいか？」

「ちつ……」

一夏の野郎。無視しやがつて。

「代表候補生って、何？」

この質問には、俺も驚いた。
さすがにこれは俺でも分かつたのに。叩かれすぎでひとつとうダメになつたか？

「お前、日本語を最初から学びなおしていい
え、ど、どういうことだ？」

まだ分かつてないらしい。今度、この脳を解剖してみたい。
世紀の大発見ができるかもしだねえ。

「代表候補生といつのは国家代表のIRS操縦者の、その候補生として選出されるエリートのことですわ」

「あ、ああ！」

「それでその自称エリートが、一体何のようだ？」

「本来なら私のようなエリートとは、クラスを同じくすることだけでも奇跡なのですわよ！」

「「そうか。それはラッキーだ」」

「……バカにしていますの？」

「こいつは分からんが、俺はバカにしてる。

「ふん。まあでも？ わたくしは優秀ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ」

……これが優しさねえ。初知りだ。

新しいことを教えてくれたこいつに、少しは感謝しよう。

「IRSのことわからぬことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくなつてよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「なあ一真。入試つて、あれか？ あのIRSを動かして戦う奴」

「それだろ。つか、それしかねえだらうよ。確か、お前勝つてたよな？」

「一応。というか、あれつて勝つたのか？」

そう聞いてくるのもわかる。あの時、相手だつた先生は一夏に突つ込んでいきそれわかわされ、壁に激突し気絶。

それで判定は一夏の勝ちになつた。

ちなみに俺は負けた。あっさりとな。

「多分……な」

今の会話がこの女にとつちゅ、かなり衝撃的だつたらしく。お前のせいで啞然としてるじゃないか。

「わたくしだけではないんですの！？」

「女子ではなくオチじゃないのか？」

一夏の一言で、何か変な音が聞こえてきた。
それもこの女から。

「まあ、落ち着け。んなこと、ビニカで起きるだろ」「！」、これが落ち着いていられ――――

キーンコーンカーンコーン。
やつといこの女の話も終わりか。

「つ――！ またあとで来ますわ！ 逃げないことに―― よくつて――！」

よくねえよ。

どうしてあそこまで上から物が言えるんだ？
ま、いいか。次の時は紬の所に行こう。
で、勉強を教えてもらひつ約束をするか。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

今度は姉さんの授業か。装備の特性ね。聞いて損はねえ。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦にでる代表者を決めるといけないな」

代表者。すっげえめんどくさいやうな役職だな。

「クラスの代表者とはそのままの意味だ。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点で対した差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

ほらめんどくさい。

しかもだ。すごくいやな予感がする。今すぐここから逃げようか。

……無理だろ? な。姉さんがいるし。

「はいっ。一夏君を推薦します!」

「私もそれがいいと思いまーすー」

「じゃあ私は一樹を!」

今のは間違いない紺だつた。そっちを見れば、紺が俺を見て笑つていやがる。

「同じく私も一樹君に一票」

「では候補者は織斑兄弟……他にはいないか? 自薦他薦は問わな

いぞ」

「ちよつ、ちよつと待つた! 僕はそんなのやらない!」

「俺もダリイからパ――――」

「自薦他薦は問わないと言つた。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟しろ」

「い、いやでも――――」

「納得行きませんわ！」

「Jの甲高い声はまたあの女か。今度は何だ？」

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリ亞・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか？」

恥さらしか。あれだけの大声は恥ずかしくないのか？
す”じいな。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのはひつぜん。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！」

人間つて元を辿れば、全員猿なんだが。ま、んなことはどうでもいいか。

つかこの女、俺たちに文句言つてたんだろう。対象が日本になつてゐるが。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけない」と自体、わたくしにとつては耐え難い苦痛で――――

「イギリスだつて大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料金で何年覇者だよ」

「キヤンキヤンうるせえよ。黙らねえとその口、石突つ込んで塞ぐぞ」

ほぼ同時に俺と一夏はキレた。

といふか、イギリスの飯つてそんなにまずいのか？ 今度食つてみるか。

「あつ、あつ、あなたねえ！ わたくしの祖国を侮辱しますの！？」
「先に日本を侮辱したのはテメエじゃねえのか？ 自分がついたつ
き言つたこと、もう忘れたか？ おい一夏。イギリスの代表候補生
の頭は空らしいで」

「一応自分の住んでる国だからな、あそこまで言われてムカつかな
いわけがない。」

「決闘ですわ！」

「おう、いいぜ。四の五の言つよりわかりやすい」

「そうだな。わかりやすくて、俺も大賛成だ」

「言つておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い
——いえ、奴隸にしますわよ」

「侮るなよ。俺も一樹も真剣勝負で手を抜くほど腐つちやいない」

「行ってくれるね、一夏。俺、お前のやうじつこと大好きだぜ。」

「そう？ 何にせよちゅうどいいですわ。イギリス代表候補生のこ
のわたくし、セシリ亞・オルコットの実力を示すまたとない機会で
すわね！」

「ん？ 一夏の奴、何考えてんだ？」

「……まさかなあ。こいつの性格だとありえねうだ。」

「ハンデはどのくらいつける？」

「あら、早速お願いかしら？」

「いや、俺がどのくらিহンデつけたらいいのかなーと」

「このセリフを聴いた瞬間、一夏の頭ぶん殴つていた。割と本氣で。
クラスの女子共も爆笑してやがる。」

「何するんだよー。」

「お前はバカか！？ バカなのか！？ 僕達はヒヒで戦うんだぞ！ 代表候補生にハンデやつてどうするー。」

「あつ……」

たくつ……どうしてここまで抜けてんだ？ つか、ここにいつらこいつまで笑つてんだ？

「……じゃあ、ハンデはーー。」

「ええ、そうでしょうでしょう。むしろ、わたくしがハンデを付けなくていいのか迷うくらいですわ。ふふっ、男が女より強いだなんて、日本の男子はジョークセンスがあるのね」

あいつの顔には明らかに嘲笑が。田の前で兄貴がバカにされるのが、ここまでムカつくとはな。

「ジョークねえ……じゃあ、これもそつ聞こえるのか？」「何がですか？」

俺は笑顔で、

「強い物イジメ」

直後、クラスはさつき以上の笑いに包まれた。笑つてろ笑つてろ。笑つてられなくなるからよ。

「女。俺達が負けたらめえの奴隸なんだよな？」

「もちろんですわ」

「なら俺達が勝つたら奴隸じゃなく土下座しろ」

「なつ！」

「まさか、そんなことでも出来ないのに奴隸なんて破格な条件を出したのか？」

「ぐつ――――――！」

セドジが叫ぶ？

まあ出来なくても、こつこつと屈辱を貰える方法はあるからな。こうこつのは、一回くらい折れた方がいい。
俺にもそれくらいわかる。

「わかりました！ 土下座でもなんでもしておしあげますわ！」

「」の時セドジ以上の笑顔になつてているのを、俺は自分で感じていた。

「セドジ、話はまとまつたな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑兄弟とオルコットはそれぞれ用意をしておくよう！」。それでは授業を始める」

一週間。

上等じゃねえか。それだけあつたらなんとかなる。
授業が終わつたら千歳に頼むか。

放課後、俺と一夏はまだ教室にいた。

「うう……い、意味がわからん……。なんでこんなにややこしいんだ……？」

眠い……あの教科書見てるだけで強烈な睡魔が襲つてくる。どうやつたら眠くならないんだろうな。

「ああ、一夏くんに一樹。まだ教室にいたんですね。よかったです」「はい？」

声のした方に顔を向けると、書類を抱えた山田先生がいた。どうしたんだ？

「えっとですね、量の部屋が決まりました」

そう言つて部屋番号の書かれた紙とキーをよこす山田先生。この学校はとある理由から全寮制なのだ。その理由とは工IS操縦者の保護だ。学生のこゝから勧誘しようとする国がいてもおかしくないからな。

「俺たちの部屋、決まってないんじゃなかつたですか？ 前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらつて話でしたけど」「そつなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理矢理変更したらしいです。……お一人は、そのあたりのこつて政府から聞いてます？」

聞いてない。が、何となくわかる。

俺たち二人は前例がない『男の工事操縦者』だから、国としても保護+監視がしたいようだ。

あの報道が流れてからいろんな奴らが家に来たからな。果てには遺伝子工学研究所の人間まで来たな。誰がモルモットになるか。

「そう言つわけで、とにかく寮に入れるのを最優先したみたいです。一ヶ月もすればお二人専用のお部屋が用意できますから、しばらくは相部屋で我慢してください」

「……まさか、こいつと同じ部屋になるのか？ それは勘弁してほしい。いや、マジで。

「というかこの先生、いつまでこんなに近づいて話してるんだ？ クラス内外の人間はこの光景にかなり興味津々のようだ。

「で、部屋は分かつたんすけど、荷物はどうすりやいいんですか？ 俺も一夏も荷物は家だし、今日は帰つてもいいっすかね？」

「あ、いえ、荷物なら――――」

「私が手配をしておいてやつた。ありがたく思え」

俺の頭の中でターミネーターの曲が鳴り響いた。ぴつたしすぎる。

「ど、どうもありがとうございます……」

「まあ、生活必需品だけだかな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろ？」

よくねえよ。今度帰つていろいろと持つてくるか。

「じゃあ、時間を見て部屋に行つてくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取つてください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年」と使える時間が違いますけど……えっと、その、お一人は今のところ使えません」

だらうな。

「は女子しかいないんだから。」

「え、何ですか？」

本当のバカがここにいた。予想を斜め上とはこのことだな。

「テメエは女子に入る気か?」

しゃべりたくなしですよ

その返答もどうかと思ひが、絶対に勘違ハラフシーが起る。

「ええっ？ 女の子に興味がないんですか！？ そ、それはそれで問題のよくな……」

ほれみろ。勘違いされた。

今先生の言葉が伝播したりして、廊下では『婦女子談義』に花が咲いてやがるし。

「一夏君、男にしか興味がないのかしら……？」

「それはそれで……いいわね」

「中学時代の交友関係を洗つて！ すぐには明後日までには裏

付けとつて！

何かもう疲れた。

さつさと部屋に行くか。

「えーと、ここか。1025室だな」

「つてことは隣か」

「そうなのか？」

「ああ、1024室だ。たぶん、近くの方がいって纏められたんだろう」

「あー、そうかも」

そんなことしそうなの、俺は一人しか思いつかないんだがな。
ま、なんことほざくでもいいか。

「じゃあな」

「ああ」

ん？　開いてる。って、相部屋だつて言つてたな。

もう中に入いるのか。

部屋に入るときつはいた。

「あれ、一樹？　どうしてここ？？」

幼なじみの天草紬だ。

こいつと相部屋ね。姉さんが手を回してくれたとしか考えられない。

となると一夏の方も、だいたい予想できる。

「今日から一ヶ月、この部屋なんだと」

「そ、そなんだ」

「どうした?」

「な、なんでもないよ?」

何で疑問形なんだ?

「ならいいんだけどよ。あー……疲れた」

手前のベッドに後ろ向きに倒れ込む。このまま眠れそうだな。
あ、意識が……。

「一樹

「ん……何だ?」

「大丈夫なの? オルコットさんとの決闘」

「……大丈夫だろ」

「でも、オルコットさんは代表候補生なんだよ」

「だからお前が教えてくれんだろ? 一週間あつたらなんとかなる」

何でそこまで言い切れるのかは、俺自身にもわからねえ。
あえて言つなら感覚だな。

「だから頼むぞ」 「うん」

ヤバい、そろそろ限界。

「紺。飯まで寝るから、その時は起こしてくれ」
「りょーかい」

「……こんな物か……」

その日の夜。

寮長室で仕事を終え眠ろうとした千冬だが、

「誰だ、こんな時間に？」

鳴り響く携帯の「ティスプレイ」には、一人いる幼なじみの「ちの」人の名前が。

「……何の――――」

「久しぶりだね、千冬ちゃん。元気してた？ というか元気だよね？ 千冬ちゃんが風邪を引いたとこ、ボクは見たこと無いもん」

（切つてやろうか）

「ダメだよ千冬ちゃん。切つたりしたら」

「何でだろうな。お前と東との電話は、いつも頭が痛くなる」「心外だよ。まあ、そこが千冬ちゃんらしいんだけどね」

あはははは、と笑い言葉を続ける。

「でさあ、本題なんだけど。一樹君の工事、ボクの会社で用意しようか？」

「何だと？」

「どうか政府からの要請で作るように頼まれたんだけどね。早く

ても一週間くらいはかかるんだけど……どうかな?」

「……」

それは思つてもないはなしだった。
兄である一夏のHISは既に決まつてゐるが、弟の一樹にはまだな
い。

「……いいのか?」

「構わないよ。だつて一樹君のためだもん」

「いろいろと申請書が必要になる。明日には送るから待つていろ」

「了解 それじゃあまたね~」

「ああ」

携帯を置き、千冬はため息をつく。

昔と変わつていない幼なじみとの電話で、披露が押し寄せてきて
いた。

(突然で無茶苦茶なのは同じか)

千冬はわざわざながら部屋を出た。申請書を用意するため。

入学式翌日の朝八時。

俺は紬と一年生寮の食堂に来ていた。

「……朝飯か」

一夏ならうちやんと食つだらうが、俺は朝からしつかり食つのは無理。

気持ち悪くなるんだよ。

一回だけ一夏に無理矢理食わされ、学校のトイレで吐いたことがある。

あれは俺の黒歴史だ。

「一樹、何にするの？」

「ブラックヒースト

これ以上は無理。

ちなみに紺は和食セットなんだが、白飯が大盛。
そういうこいつ、昔から大食らいだったな。

「行こつか？」

「ああ」

食堂の中を見渡せば一夏と紺の姿も。
あそこでいいか。

「うつす」

「おはよっ」

「ああ、おはよっ」

「……おはよっ」

何か紺の怒怒つてないか？

この状況を見て、俺はとある結論に辿り着く。
この朴念仁がなにかしたのだろうと。

「だから紺――――」

「な、名前で呼ぶなっ」

「……篠ノ之さん」

「……」

「おい、第

「何だ？」

俺には反応するのか。一夏の奴は軽く納得してないようだけだ。

「今のは無茶苦茶だろ」

「……」

そこにはスルーかよ。

「お、織斑くん、隣いいかなっ？」

「へ？」

「あ？」

織斑は一人いるからな、当たり前の『』とく俺も一夏も返事をした。見ると、トレーを持った女子が三人。

「ああ、別にいいけど」

一夏が反応すると三人は三者三様の反応を、周囲からはざわめきが聞こえてきた。

俺は飯を食つてすぐ寝たから詳しく述べ知らんが、部屋に女子が詰めかけて来たらしい。

紹には迷惑をかけたな。

「うわ、一夏くんつて朝すつごに食べるんだー」

「お、男の子だねー」

「俺は夜少なめにとるタイプだから、朝たくさん取らないと色々きついんだよ」

「それに比べて一樹くんは少ないね」

「私達と同じだ」

女子の一人の量つとおり、量はほとんど変わらない。

三人組のトレーにはメニューは違うが、飲み物一杯にパン一枚、おかず一皿（しかも少なめ）がある。

「俺は朝はこれでいいんだ。この三人みたいに食つと気持ち悪くなるんだよ」

「そうなんだ」

一度一夏に二つ話したら燃費がいいだのと言われた。

俺は車か。

「……三人とも、私は先に行く
ん？ ああ。また後でな」

さつさと食つて箸は行つてしまつ

「どうしたんだろう、篠ちゃん？」

「知らね。そこのバカが何かしたんだろ」

「何でそうなるんだよ」

そうとしか考えられない、とは言わないでおくか。

「四人で仲がいいよね？」

「知り合いなの？」

「知り合いというか、幼なじみだし」

「うん。小学校の時からだよね」

瞬間、当たりがどよめいた。幼なじみがそんなに珍しいか？

「え、それじゃあ————」

女子の一人が質問しようとしたりで、手を叩く音が響いた。

「こつまで食べっこりー。食事は迅速に効率よく取れ！ 遅刻した
らグラウンド十周せせるゾー。」

姉さんの声がよく通る。

よし、わざと食つた。一周五キロのグラウンドなんぞ走つてた
まるか。

つか、あの人いつ休んでるんだるつか？
ま、いいか。

授業はやっぱつわかんねえ。

休憩でそんなことを考えていると、あたりは女子でこつぱこにな
つた。

本当にめでたしくせう。

「ねえねえ、一夏くんと一樹くんをあーーー

「はいはーー、質問しつもーん！」

「今日のお皿ヒマ？ 放課後ヒマ？ 夜ヒマ？

「いや、一度に訊かれても————」

そこで俺と一夏は気がついた。紬の奴が有料で整理券を配つてることに

俺達で商売をしてんじゃねえよ。

ちなみに簫はこっちを黙つて見てる。起きてるよつにしか見えないんだよな。

「千冬お姉様つて自宅ではどんな感じなの？」

「え。案外だらしな———」

パンツ！

「休み時間は終わりだ。散れ」

ナイスタイミングの叩き。個人情報をばらすな、つてことだな。

「ところで一人とも、お前達のHSだが準備まで時間がかかる

「へ？」

「予備機がない。だから少し待て。織斑兄のは学園が、織斑弟のは天草重工が専用機を用意するようだ」

「？？？」

天草重工つて紬のとこだよな？ てことは暦さんが何かしたのか？ あの人ならやりそうだ。

「せ、専用機！？ 一年の、しかもこの時期に！？」

「つまりそれつて政府からの支援が出てるつてことで……」

「ああ。いいな……。私も早く専用機欲しいなあ」

そりや騒ぎにもなるか。

俺だつて驚いてる。

「織斑兄、教科書六ページ。音読しろ」

「え、えーと……『現在、幅広く国家・企業に技術提供が行われているIISですが、その中心たるコアを作る技術は一切開示されません。現在世界中にあるIIS467機、そのすべてのコアは篠ノ之博士が作成したもので、これらは完全なブラックボックスと化しております、未だ博士以外はコアを作れない状況にあります。しかし博士はコアを一定数以上作ることを拒絶しており、各国家・企業・組織・機関では、それぞれ割り振られたコアを使用して研究・開発・訓練を行っています。またコアを取引することはアラスカ条約第七項な抵触し、すべての状況下で禁止されています』……」

「つまりそういうことだ。本来ならIIS専用機は国家あるいは企業に所属する人間しか与えられない。が、お前達の場合は状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることとなつた。理解できたか？」

「な、なんとなく……」

簡単に言えば専用機をやるからモルモットになれ。つてことだ。状況が状況なのはわかるけど、モルモット扱いはマジでやめてほしい。

まあでも、これであの女といい形でやり合えるわけだ。

IISが来るまでは一夏と『あれ』をやつとくか。

……放課後まで寝よ。周りが何か騒いでるが、睡眠欲には誰も勝てないのだ。

パンツ！

「ぬおおつ

「さて、授業をはじめるぞ。山田先生、号令」

イテH……。

それは違うと思つや。

「……………」
「はい？」
「鍛え直す！　IS以前の問題だ！」

帰宅部つつても、家計のためにバイトしてたんだよな。

「受験勉強してたから、かな？」
「…………中学では何部に所属していた」
「帰宅部。三年連続皆勤賞だ」

これが小学校の時の一夏ならわからなかつたと思つ。

弱くはなつていないと思つた。俺がサンドバックにしてたから、回避に関しては一流のはずだ。
多分な。

なら何で負けたのか。それは一夏が攻撃に転じた瞬間を狙つたのだ。

「……………」
「……………」

開始十分で一夏の一本負け。

俺達は剣道場にいた。
俺と紺はギヤラリー。一夏とした算は防具を付けて、つこうひきまで打ち合つていた。
そうひきまで。

時間は飛んで放課後。

俺達は剣道場にいた。

俺と紺はギヤラリー。一夏とした算は防具を付けて、つこうひきまで打ち合つていた。

そうひきまで。

「ていうかエリのことをだな」

「だから、それ以前の問題だと言つていい!」

「情けない。エリを使うならまだしも、剣道で男が女に負けるなど

……悔しくないのか、一夏!」

「そりや、まあ……格好悪いとは思つけど」

「格好? 格好を気にすることが出来る立場か! それとも、なんだ。やはつこうして女子に囲まれるのが楽しいか?」

「箒。それはダメだ。」

「楽しいわけあるか!」

「ほらキレた。」

「しようがない。」

「一樹?」

「うと行つてくる。あれじや一夏のためにもなりと」

俺が動き始めた時には、箒が防具を外した一夏に竹刀を振り下ろし、一夏はそれを受け止めていた。たくつ……。

「止める、箒

「何だ?」

「おー、じええ。」

「一夏の特訓は俺がやる。だから、お前はそのバカにエリのことを教えてやれ」

「何だと？」

「だからそいつの特訓は俺がやるって言つてんだよ」「私では役不足だというのか！？」

「んなこと言つてねえだらうか。少しは話を聞け！ つか、そんなだと振り向いてほしい奴に振り向いてもらえないぞ」

と、耳元で呟いてやると簫は顔を真っ赤にした。

おーおー。わかりやすい奴だ。

「何を言つている貴様は！」

「それにお前がいなかつた間の一夏のことも、いろいろと教えてやるからよ。それで手を打て」

「……わ、分かつた。一夏！ 私がしつかりエリのことを教えてやる！ いいな！？」

そう言い放つて簫は一人、剣道場から出て行つた。

「お前、簫に何言つたんだ？」

「さあな。んなことより、簫に変わつて俺が特訓相手だ」

一夏の顔色が見る見る真つ青になつていぐ。
どうしたんだろうなあ？ くくくく。

「つーわけで、今から組み手だ。いいな？」

「いや、それは――――」

「問答無用だ」

「つ、紺！ 助け――――」

「ゴメン、無理」

俺は一夏の首根っこを掴んで剣道場の外へと向かつた。

ასეთი დოკუმენტი არ არის。

第四話（前書き）

ISでの戦闘って、かなり難しいですね。
そんなわけで結構書き直してこれですが……もっと精進していく
ます。

それでは始まります。

本編の中で出てくる四葉についてです。
ガントレット = 籠手

アーマー = 具足

一応調べたので間違いはないと思います。

「来ねえな」

あれから一週間の当口。まだ俺達のIISは届いてない。

俺達四人は沈黙。

「い、一夏くん一樹くん一夏くん一樹くん一夏くん一樹くん一・」

第三アリーナ・Aピットに駆け足でやってくる山田先生。

「はい、そこで止める!」

一一

ノリで言つたらマジでやつたよ。
しばらく何も言わないで黙つてみよう。

もうちょいやついてほしかつた。完璧酸欠になるまで。

「田上の人間には敬意を払え、馬鹿者」

「ゴッ！ もつと優しくしてほしい。やうじやないと反抗期がまたやつてくるわい。

「千冬姉……」

「姉さん……」

「パンツ！ パンツ！」

「織斑先生と呼べ。学習しな。そもそもなぐば死ね」

今日本当に教師の言葉かよ。

「そ、そ、それでですね！ 来ました！ お一人の専用エス！」

やつと来たか。

「二人とも、すぐに準備しろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶつつけ本番でもにしろ」

は？

「」の程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えてみせぬ。一夏

「一樹ならこんな壁、ぶち壊しちやうね」

「うう」とだ？

「 「 「 「 早べー.」 」 」

山田先生、姉さん、篠、紬の声が重なった。
鈍い音がして、ピットの搬入口が開いていく。

——アーニー、『白』と『黒』がいた

俺は『白』よりも『黒』に目がいった。

黒。真っ黒。全部を飲み込んでいくよつた漆黒を纏つたISが、
そこに立っていた。

「左側が一夏くんの専用IS『白^{ホワイト}』、そして右側が一樹くんの専
用IS『^{コクオウ}黒王』です！」

『黒王』。何て言つたらわかるねえけど、そいつは俺を待つてい
るよつた気がした。

そして俺もこの時を魔つてた気がする。

「体を動かせ。すぐにそうちやくしろ。時間がないからフォーマッ
トとフィットティングは実戦でやれ。出来なればまけるだけだ。わ
かつたな」

俺は漆黒のISに触れる。

何だこの馴染む感じ。すうげえいい。

「背中を預けるよつたに、ああそつた。座る感じでいい。後はシステ

ムが最適化をする

「姉さんの言つとおりに体をISに預ける。

これがISか……。

——戦闘待機状態のISを感知。操縦者セシリア・オルコット。
ISネーム『ブルー・ティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。特
殊装備有り——

「ISのハイパーセンサーは間違いなく動いているな。一夏、一樹、
気分は悪くないか？」

今の一言で姉さんが心配してくれることがわかった。
だつて俺達を名前で呼んだんだから。

「大丈夫、千冬姉。いける」
「問題ねえよ、姉さん」
「そうか」

まずは俺からか……ボコボコにしてやるよ。

「一樹」
「んあ？」
「頑張つてね」
「当たり前だ。行つてくる」

ゲートが開き、アリーナに向かう。

「あら、逃げずに来ましたのね」

「Jのバカは一体何を言つてるんだろうな。

「逃げるか。俺の目の前で一夏をバカにした野郎を殴れるんだからな！」

「そうですか。なら――――」

「ピーチクパークうるせえよ！」

女の言葉を遮つて叫ぶと、俺の体はいつもの喧嘩の時のように動いていた。

つまり構えていない女に、手加減無しに殴りかかっていた。顔面に向かって。

「うあつー！」

試合開始の鐘はなつていても反則でも何でもない。

隙だらけだつた女は防ぐことも出来ず殴り飛ばされた。

「喋つてる暇があつたら、戦う準備でもしたらどうだ？ 俺は一週間も待つたんだ。兄貴をバカにしてめえを、この手でボコボコに出来るこの瞬間をよおー！」

今の俺が女やこの決闘を見ている生徒共に、どう移つていいのかはっきり分からねえ。けど、昔姉さんに言われたことがある。喧嘩をしている時の俺はまるで野生の獣だと。

まあ、そつなのかもな。喧嘩してるときの俺は本能でしか動いてねえし。

「それほこひのせりつです」

「がつー!?

肩に走る激痛。

前からではなく後ろからの攻撃だった。
振り向けば何かが浮いていた。

あれか……。

「いいねえ……やっぱこいつじやねえとな!」

開戦から二十分。

俺の方が劣勢に陥っていた。

まあ当たり前か。あつちは中距離用の装備に対して、俺は近距离用の装備。

このままじや俺の負け。なんだけど、俺には秘策がある。それで
懷に潜り込めれば、俺の勝ちは確定だ。

「初見でここまで耐えたのはあなたが初めてですわね。褒めて差し
上げますわ」

「そうかい」

褒められても嬉しくないってす、こいな。

俺が見ているのは女じやなく、空を飛び回るビット兵器。
あればかり見ているとレーザーライフルで狙われるが、見ていない
とやられる。

めんどくさいな。

あれ使うか。

紬が俺と一夏に覚えておいて損はないと教えてくれた『瞬時加速』
を。

「」の一週間、ISに触つてないから一度も練習していないけど、理屈さえ分かつてれば何とかなる。

確かに理屈はこうだつたな。後部スラスター翼からエネルギーを放出、それを内部に一度取り込み、圧縮して放出する。その際に得られる慣性エネルギーを利用して爆発的に加速する、だつたな。

あー、ややこしいのは面倒だからこつだな。

まあ圧縮したエネルギーを使って爆発的な加速するつて、といろだな。

「つーわけで、行くぜー！」

初の『瞬時加速』は、

「うあー！」

成功。

一機目を握りした。

「なつー？」

女としては俺がこんなことをするのは、完全に予想外だつたみたいだな。

次に狙つのは一機目のゲシト兵器。

「第一ラウンド、始めるぞ！」

「本当に成功させやつた……」

一樹が『瞬時加速』を成功させた瞬間、紬はそう呟いていた。
彼女自身も、一樹が本当に成功させるとは思つてもなかつたのだ
るつ。

「天草。織斑弟にあれを教えたのはお前か？」

「あ、はい。でもIISを使って見せたわけじゃなくて、私は理論を
教えただけです。だから実践で使うのはこれが初めてだと思います
……多分」

理論を教えてだけで成功させた。

それはある意味信じがたいことであった。とくに彼女、山田真耶
は。

「初めてで成功つて……」

「私も弟でなかつたら驚いていたな。だが、あいつはそれくらいや
つてのける。そもそもあいつのことだ。IIS自体、感覚だけで動か
してゐるだらうな」

千冬の言葉に一夏も黙つたまま領いでいる。

「本当に初心者、なんですね？」

彼女がそう聞くのも無理もない。『瞬時加速』を使うようになつ
てから、一樹の方が押し始めていた。

セシリアのビット兵器『ブルー・ティアーズ』も、存在している
のは残り一つとなつていてる。

「間違いなくな。だが、この模擬戦は間違いなくオルコットが負け

る
「えつー？」

「奴は喧嘩だと誰にも負けん。私も剣術や剣道などでは負ける」と
はないが、型にはまらない喧嘩なら負ける」

「や、そつなんですか……でも、その話がどう関係してくるんです

？」

「つまり奴はこの決闘を『喧嘩』とこの認識で戦つてゐる

」のところでの決闘は、武器を使って相手のシールドエネルギーを
0にすれば勝ち、ところもの。

一樹からすれば喧嘩と変わらないのだ。

「一夏！」

「どこに行く気だ？」

「一樹を止める。じゃないと……」

「不可能だ。おそらく『瞬時加速』を使用した時点で、あいつの中
のスイッチは半分入っている」

そんなことは一夏に分かつていた。そしてスイッチが入つてしま
うような状況になつてしまつた理由も。

モニターに移る一樹は、最後のビットを握りつぶやうとしていた。

（一樹……）

「これでラストオー！」

最後のビットを握り潰して、あいつはやつと丸裸になつた。

「さて、そろそろ終わるにするか！」

方向を変えて再び『瞬時加速』。一気に女に近づいていく。

「うあっ！」

「いつがライフルを引くよりも、俺の拳が早い。」のまま殴り続ければ俺の勝ちだ！」

「―――かかりましたわ」

その言葉に俺は本能的な危機を感じ、スラスターの向きを変更。『瞬時加速』を使って離脱しようとしたが、間に合わなかつた。

「あいにく様、ブルー・ティアーズは六機あつてよー！」

ビームじゃねえ、ミサイルだ！

そう思つた瞬間、俺は爆発に包まれた。

――フォーマットとフィットティングが終了しました。確認ボタンを押してください。

……このボタンを押したらいいんだな？
よく分からぬままそのボタンを押す。

整理されていく情報。そして『黒王』は俺の物になつた。
何となくそれが理解できた。

「ま、まさか……一次移行！？　あ、あなた、今まで初期設定だけの機体で戦つていたつて言うのー？」

――近接特化ガントレット・《フェンリル》、近接特化アーマー・

『ガルム』。

「よつやくだ。よつやく本当の意味の俺のHで、兄貴をバカにした奴を叩き落とせる！」

ダメージは一次移行した時点で全回復。俺は目を見開いて、女だけを見る。

「ひつ」

何に脅えているか知らねえが、お前は終わりだ！

俺は今まで一樹をバカにした奴を、一度も逃がしたことはないんだからな！

「テメHの意識がある内に教えておいてやるー。俺は一夏を侮辱する奴は、誰だらうと絶対に許さねえ！」

『瞬時加速』でもう一度近づいて、全力でぶん殴る。ミサイルで攻撃されてるが関係ない。

左手で女の右手を掴み俺から離れなこよつにして、また殴る。まだ殴る。もつと殴る。さらに殴る。

腹を、胸を、肩を、腕を殴り続ける。

「潰れろおー！」

「つー！」

拳が女の顔面を捉えよつとした瞬間、

『ダメエツー！』

『一樹ー！ それ以上は止めろー！』

聞こえてきた紺と一夏の声。一気にスッキリしていく頭の中。
女の身体を包む青いE.Sはボロボロ。女自身もかなりダメージがあつた。

『試合終了。勝者——織斑一樹』

試合終了を告げるブザーと共に、姉さんの声がアリーナに響いた。

「馬鹿者が」

いつも以上の威力の拳骨が俺の脳天に突き刺さつた。

「いってえ！」

「一つ聞く。どこのでスイッチが入った？」

スイッチは……、

「多分一次移行が終わつた瞬間だと……俺のE.Sで一夏をバカにした奴を殴れると思つたら、そこから記憶が曖昧で……」

だから俺への攻撃が止まつたタイミングなんて、全く分からぬんだよ。

「……そうか、分かつた。織斑兄。本来ならこのままお前とオルコットの試合をする予定だったが、明日に持ち越しだ。この馬鹿のおかげで、オルコット自身だけでなく、E.Sのダメージも大きいからな。異論はないな」

「はい」

「私はそれをオル「シット」で止めてくる。今日は解散」

そう言い残して姉さんは出て行った。

……ホント疲れた。せつと帰つて寝よう。

「一夏」

「どうした簞？」

「一樹はあんな性格だつたか？ 小学生のころから喧嘩つ早いところがあつたのは知つているが」

「ああ、あれは……問題があつてな。だから説明してくいんだ」

「そうか。なら、今は聞かないことにする」

「そうしてくれるとありがたい。じゃ、俺達も戻るつか」

「やうだな」

「納得がいきません！ 私はまだ負けていませんわー！」

強制的に負けとされ、次の模擬戦は明日だと説明されたセシリ亞は、その説明に来た千冬に囁みついていた。

「どうか。ならお前は織斑弟に勝てるのか？ あいつはあのまま殴り続けていたぞ」

「それは……」

殴られ始め、三発目でセシリ亞の頭の中は痛みで支配されていた。そんな状態でE/Sを操作できるはずがない。

「そうこうことだ。あいつと戦いたいのなら、また別の機会にする

といい」

「ですが！？」

「くどいぞ、小娘」

「つ！」

「以上だ。お前も明日に備えてもう休め」

「分かり、ましたわ」

千冬がいる手前そつしつしかなかつたが、割り切ることが出来ない。
時間がたつていくにつれこの憤りは、徐々におおきくなつていく。

「織斑一樹……」

「呼んだか？」

「なつ！？」

その声の主、織斑一樹は音もなくそこにいた。

第五話（前書き）

ただ今すゞい悩みがあります。
それは一樹の周りを固めるヒロインズを誰にしようかと。二人は
まあ、決まっているんですが……あと一人、一樹側にと考へている
んです。

と、前書きはここまで。それでは第五話、始まります。

「な、何であなたがここにいますの…?」

「ん? お前に話があるから、わざわざ来たんだよ」

「話?」

「ああ。模擬戦、もう一回やらねえか?」

「は?」

一樹のとんでもない提案に、頭が追いつかないセシリア・オルコットであった。

次の日の放課後。

現在、一夏対女の戦闘が行われている。
と言つても一夏の負けはかなり近い。

「「あの馬鹿(者)が、浮かれてるな」」

俺と姉さんの声が被る。

「えつ? どうしてわかるんですか?」

「さつきから左手を閉じたり開いたりしているだろ? あれは、あいつの昔からのクセだ。あれが出るときは、大抵簡単なミスをする」「へえええ……。ですがご兄弟ですねー。そんな細かいことまで分かるなんて」

お、山田先生が姉さんをイジリ始めた。何となく予想は出来てるけどな。

「一樹もよく分かつたね」

「そりやあ今まで何度も見てきて、何度も直すよつて言つてきたからな。気づかないわけないだろ」「確かに……」

結局直る」となく今日に居たつたわけだ。

「さて……あのひと、どうするかな?」

「ん?」

「いや、何でも――――――

「織斑弟」

隣にいた紺にさえ聞こえないようこぼいたつもりだつたんだけどな。

たまに思つ。」の人、人間の皮を被つた何かじやないかつて。

「ちょっと来い」

「……分かつた」

「コッ。

「敬語を使え」

「はい」

連れてこられたのはペットの外。壁の向いには紺達がいる。まあ聞こえるわけがないけど。

「それで、あのことは何だ？」

「……俺も昨日のは、まだ納得していない」

「何だと？」

「あんな決着、納得するわけないだろ。それはあの女もだ」

「……そうか。で、何が言いたい？」

「もう一回あいつと戦わせろ」

「ダメだ」

即答だった。

「何でだ？」

「またスイッチが入つたらどうする？ 今回、お前はオルコットを殴り殺す勢いで殴つっていたんだぞ」

「……次はならない。絶対にだ」

「なぜそう言い切ることが出来る？」

「次の決闘はただ決着を付けたいだけだからだ。一夏は関係ないからスイッチは、喧嘩の部分しか入らないだろ」

そろそろ姉さんに、俺のスイッチのことを言わないとな。

「喧嘩の部分、だと？」

「俺のスイッチは二個ある。喧嘩用と、一夏のためのスイッチだ。あの時は両方のスイッチが、特に一夏用のスイッチが強く入つたからあんなつだけだ。喧嘩だけだと、あそこまでならねえよ」

「……」

今の話を聞いて黙つたままの姉さん。まあ、信じるのは難しいよな。

でも信じてもらわないと、模擬戦は多分出来ない。
後回しにするよりも、俺はさっさと決着を付けたい。

「頼む」

「……分かつた。だが、条件がある」

「条件?」

「そうだ。もしお前が昨日のよつなことになれば、強制的に試合は終わり。今度はオルコットを勝者とする。この条件が飲めないのであれば、模擬戦はやらせない」

ホントこの人は、やさしいんだか、やさしくないんだか。めんべくせい性格してゐるな。

「分かつた」

「なら準備を始める。お前とオルコットの戦闘はこの後だ」「つて、どこに行くんだよ?」

「お前のおかげでやらなければならぬこと」が出来たからな。それを終わらせてくる。それと教師には敬語を使え。いいな?」

そう言つて姉さんは歩いていった。

サンキュー、姉さん。

一夏対女の結果は一夏の負け。惜しいところまで行つたの間違いないけど、ギリギリの所で自爆しやがった。いつも思つけど、どこか詰めが甘いよな。で俺はと云つと、

「ルールは一応聞いてるな?」

「ええ。強制的に私の勝ちになる可能性があるといつのは納得できませんが――――

「問題ねえ。ちゃんと決着をつける。強制的に勝者なんぞ決めてた

まるか

黒王を纏い、再びアリーナで女と相対していた。

「つーわけで、始めるぞー。」

試合開始の鐘は少し前に鳴っている。だが、俺達にとつてはこれが試合開始の鐘だった。

「はあつー。」

先手必勝。それが俺のモットー。

『瞬時加速』で雨よりも早く動いていた俺は、拳を振り上げ殴る準備は万端。後は近づいて、それを振り下ろすだけ。だつたんだが、スラスターの向きを変えて真横に移動した。直後駆け抜ける光。後一瞬でも遅かつたら、まともに直撃していたのは間違いない。

「よく交わしましたわね」

射程内に入る前にビームライフルをコールしたらしい。

あぶねー。

「何となく危ない気がしてな

今のは完全に野生の勘。アラートがなる前に体が動いて、無意識にやつたことだ。

次もやれといわれて同じことは出来ねえ。

今のやり取りの間に配置したんだろう。俺を囲むようにビームシットが浮いている。

俺が動けば、それと同時に発射されるんだろうな。だけどこいつ、

忘れてないか。俺が『瞬時加速』を使えることを。

「させませんー！」

「ぐあーーー！」

背中に走る激痛。

『いつ、今スラスターの動き撃つたのか？ そんなんだとしたら……おもしれえ！

頭の中でカチツ、つて音が聞こえた気がした。

「行くぜ、セシリア・オルゴットーーー！」

俺は後ろ向きに『瞬時加速』。その先にビットがあるのは分かっている。

田の前じゃあいろんな音が鳴っていて、かなづつるせえ。シールドエネルギーも減り続けているし。だが関係ない。

『瞬時加速』をいったん止めて、もう一度加速。俺が向かうのは、俺から最も遠いビット。

いつも俺から一番離れているビットの動きだけが遅いのを、何となく気がついていた。それは今でも同じ。だから、

「捕まえたつ！ そして……「おらあーーー！」

女に向かつて全力投球！ 自分自身の装備が攻撃に使われるのは、完全に予想外だつたんだろ。あいつは睡然としているし、ビットも動きを止めている。

ならもう一つだ。

次は一番近くにあつたそれを掴んで、同じように投げつけた。

一度目は直撃だったが、二度目は避けられた。まあそうだろうな。今みたいなのは、一回だけだから成功する。猫騙しみたいなんだ。

だけど陣形は完全に崩れた。攻めるなら今のはず。あいつの懷に飛び込むことが出来るのは、多分今が最大のチャンス。ここで決めてやる。

「うおおおー！」

『瞬時加速』で懷まで潜り込んだ俺は、女の腹に一撃。

「かはっ……」

ここまで来て俺は大事なことを一つ思い出した。
『いつのゲットは後二つある』。しかもゲームじゃなくてミサイルの。

「今まで！」

放たれるミサイルと同時に、俺は手を伸ばしていた。
直撃したけど関係ない！

「離さねえぞ！ 今離したら、もう近づけないかもしれないからな
！ だから落ちろー！」

「それはあなたですわ！」

殴り続ける俺と、ミサイルを撃ち続ける女。
シールドエネルギーはすごい勢いで減つっていく。女の方もそعد
る。う。

もう何十回殴つたか分からぬ。女のほうは//サイルは切れた
しき、ちょっと前からビームだけになつてゐる。

「おーりあー！」

今の一撃でうつかり手を離して、女を殴り飛ばしてしまつた。
本氣でヤバい。エネルギーはもう無いから、『瞬時加速』に回す
余分は無い。

……あり？ あれの理屈つて、スラスターから放出したエネルギー
を取り込んで、圧縮したエネルギーで加速するんだつたよな。じ
やあ、スラスターから出したエネルギーじゃなくても……たぶん出
来る。

チャンスは一回しかないけど、絶対に成功させてやる。
動きを止めてそのタイミングを待つ。

——警告。後方よりロックオンされました。

来た！

ビームが発射された、独特の高い音が聞こえた。
行くぞ、魔王！

「ぐつ……」

背中には重い衝撃。だがシールドエネルギーは減らない。

「おおおおー！」

ビームのエネルギーを取り込んで、圧縮して加速！
すげえな俺。成功させちまつた。

「これで……」

一発目。下から打ち上げるよ／＼殴つた。

「がつ」

女の体は浮き上がる。

一発目は蹴り。更に女の体を打ち上げる。俺はそれを追いかけた。そしてトドメの一撃は、

「終わりだあ！」

踵落とし。

急降下していく女。その時俺は聞いた。

「終わりは……あなたです。織斑一樹」

俺にしか聞こえないような声で、あいつがそう呟いたのを。間違いないなくそう言つた。

そして田の前にそれ、ビットが現れた。つまりそういうこと。逃げることも許されず俺は打ち抜かれ、シールドエネルギーは0となつた。

そして試合終了の鐘が、アリーナに響き渡る。

『試合終了。勝者——セシリ亞・オルコット』

「約束は守つたようだな」

そう言つ姉さんは、何となくホッとしているよつて見える。
俺がいつ昨日みたいになるか不安だったんだうつな。

「当たり前だ。勝手に負けになるのはほんまにしな。つか、俺が約束を守らなかつた時があつたか？」

「小学生のころの記憶しかないが、そこそこあつたと想つが……」

なあつ！

「セレセレヒヒヒつか、かなりだよね」

ぐう！

「俺なんつまともに約束を守つてしまつたことないこみな」

……ブチン。

「一夏……死のつか？」

「何で俺だけ！？」

「考えりや分かるだる」

視界の端で紬と簫が頷いているのが分かる。

喧嘩だけなら姉さんに勝てる俺と、まともにやつ合ひ戻はねならないだらつ。俺としても氣が引けるし。

「つーわけで始めよつか。お前が氣絶するまでの、地獄の組み手を

……

「！」断る！

「断ることを断る！ だから俺に殴られろ！」

「嫌だ！」

「織斑弟」

「ん？」

「逃げ出していくよ」

一夏の味方がいなくなつた瞬間であった。

「織斑先生の許可も出だし、行こうか」

「に」

「に？」

「逃げるが勝ち！」

全力でピットから逃げ出していく一夏。
逃がすわけがないだろ？

「待てやあ！」

絶対にサンドバックにしてやる。

「ちう……ちうこもやがつた、あの野郎」

一夏を追つて寮の辺りまで来て、完全にあいつを見失つた。
昔から逃げ足だけは早いからな。
しようがない。他の方法であいつにお仕置きするか。

「ちう……ん？」

「あい？」

いつの間にか女が目の前に立っていた。まあいてもおかしくはないか。すぐそこに寮があるんだし。

「……」

「クラス代表おめでたさん」

「え？」

「だつてそりだろ。一夏には勝ってるし、俺との試合も一回はお前の勝ちだし」

「そう、でしたわね。ですが、それは辞退させていただきます」

「……はあ？」

全く意味が分かんねえぞ。こいつクラス代表になりたいんじゃなかつたのか？ といふか、こいつがならなかつたら俺か一夏が、クラス代表にならなくなつちまう。

クラス代表になるのだけは絶対に回避したい。

「ですからあなたに――――――

「俺はならねえ」

「え？」

「そもそも俺は、あんなのになりたくて決闘を受けた訳じゃねえ

「そりだつたんですねの？」

「ああ。あの時言つたろ。土下座をせのつて。あれが目的だ」

「……」

何固まつてんだ、こいつは？

「ふふふ……本当に面白い方ですね」

「何入つてんだ？」

「何でもありませんわ。それよりも、あの時は失礼なことを言つてしまつて申し訳ありませんでした」

「……まあ、いいんじゃね。一夏ももう気にしないみてえだし、お前も気にしなくていいと思つぞ……そういうやお前、クラス代表を辞退するんだよな?」

「ええ。ですからこれから織斑先生に、その顔を覚えていこうとしていましたの」

これ、あいつへの復讐に使える。俺も辞退すりゃ、クラス代表はあいつだ。

理由はまあ……適当に言えればいいだろ。

「へへへ……女! 僕も行く
「え、それはどういづ
「俺も辞退すんだよ」

女の手を引っ張つて、俺は校舎へ向かつて走り出す。

「ち、ちよつと…待つてくださいまし!」

一夏あ! てめえがクラス代表になるのは確定事項だ!
あーは
つはつはつー

第六話（前書き）

一巻の半分がようやく終わりです。長かったような短かったような。

それでは第六話、始まります。

「一樹と一夏、どこに行っちゃったのかな？」

「二人とも、もう寮に帰ったのではないか？」

「そつなさいいんだけど……何かこう、胸の辺りがざわつくつてい
うか、嫌な予感がすると言うか……分かんないけど、一樹を見つけ
ないといけないの！」

自分自身でもよく分からぬ衝動に駆られ、天草紬は幼なじみで
ある織斑一樹を探していた。

ちなみに篠は紬に、一緒に探してほしいと頼まれ断りきれなかつ
たため、今彼女といふわけである。

「あと探してないのって、どこだっけ？」

「職員室の辺りと寮だけだ」

「なら職員室だね！」

そう言つて職員室へ走り出す紬と、それについていく篠。
しかしそれがこの後の大惨事を起すことになるなど、誰も予想
はしていなかつた。

「こ」は職員室前の廊下。夕焼けでオレンジに染まつていて、かな
り綺麗に見える。が、今の紬にとつてはどうでもいいこと。

「いないな」

「そうだね。こ」でもなかつたかあ……

ここにもいなことは何となく分かっていた。それでも淡い期待はあったので、少しばかり落胆してしまう。

そして次の搜索場所となる寮へ向かうため、来た道を戻ろうとした時だった。

「失礼しました」

聞き覚えのある、やる気無しの声が職員室の方から聞こえてきた。それは紺が探していた人物の声。

「いっ……っ！」

大声で呼ぼうと声を出した紺だったが、それ以上言葉は出なかつた。

その原因は彼の後から出てきた彼女にある。

「失礼いたしました」

セシリ亞・オルコットである。

「へえ……」

「つ、紺？」

「何？」

その時、簾は紺に対し尋常じゃない恐怖を抱いた。

簾を見る彼女の顔に表情はなく、瞳にはさつきまでの光はない。目を逸らせない。逸らしてしまつと、自分はこの場で死んでしまうのではないか。そんな錯覚を抱いていた。

「あははは……簾ちゃん、寮に帰ろうか？」

「あ、ああ……」

準備しなきゃね。殺る準備を……」「

「ぬおおおおお！」

ただ今俺は、全力で紺から逃走中。捕まつたら死は免れないのは確かだ。

言 て お く が、 僕 は こ い 一 は 逃 れ る 球 田 は 身 に 貫 く は な い
俺、 何 か し た か ？

モード、スタートオ！

「くくく……これであいつがクラス代表だ」

寮にエントランスで女と別れた俺は、入学して初めてなんじやないかと思うくらいの上機嫌だった。

が0になつたからだ。

よかつたよかつた。あんな面倒な役職、なつてたまるかつての。

一樹

「お、第
か。
どうした？」

その……今、部屋に戻らない方がいい」

— はあ？

突然ここには何を言つてんだ？

「私は幼なじみを失いたくない。だから忠告しているんだ！」

「失うつて――――」

「これは本氣だぞ！」

「お、おう……」

篠は何かに怯えている。それが見て取れた。

俺に関係していて、しかも怯えている。まさかなあ。

「忠告したからな！」

何故だろう。本能が警報をならしている気がする。でも部屋には戻らないとな。

頭の中で警報が鳴り続けるが、俺は篠が去つていった方に歩き始めた。つか、部屋隣同士だし。
そして、

「ついに来たか……」

ここに立つていても始まらねえ。さつさと――――扉に手をかけて、俺は異常な寒気を感じた。

寒いのに何故だろう、汗が止まらない。背中は汗でびっしょりです、はい。

何だろうか。ここにいたら死ぬ！ 体は勝手にバックステップしていた。

ドスッ。

さつきまで俺の頭があつた場所を、銀色の光り輝く物が貫いた。

「ちつ、外したか……」

何だ、今の低い声は。あいつの声じゃなかつたる。

「げつ」

そいつは扉を切り裂いて、部屋の中から出できやがつた。

「つ、紺……」

「遅かつたね、一樹い」

白無垢に模造の日本刀を持った紺が、俺の目の前に立つていた。
俺を見つめる瞳に光はない。

しかも紺の後ろには漆黒の何かと、般若の顔が見えた。

「な、何でそんな格好をなんでしょうか?」「ん? 分からない?」

分かつていてるけど、頭が理解することを拒否しています。

「一樹を斬るためだよお
「斬られてたまるか!」

走りだそうとしたが、
「逃がさないよ」

一瞬で間を詰めて刀を振り抜かれた。狙いは俺の首。
しゃがむことでギリギリ避けると、歩いてきた方に走る。目的地
は寮の入り口。

と、ここまでが俺が逃げることとなつた経緯だ。

奇跡的に廊下には誰もいない。たまたまなのか、それとも紺の殺

氣で出てこられないのか。どちらにしても、俺たち以外廊下にいな
いのは助かる。

『夜叉モード』。それが今の紺の状態だ。命名は俺。この状態に
なる条件は不明。

分かっていることはこの状態の紺の身体能力は異常で、俺は勝つ
たことはない。

「ザツ……」

「知ってるよねえ、一樹い。逃げ切るのは不可能だつて」

後ろから追いかけてきていたはずの紺が、何故か俺の前にいた。
こいつ、いつの間に。チヤキ。

「俺が何で斬られるのか、一切不明なんだけど
「どうしてだろ? ね? もう追いかけっこはいいよね。部屋に戻ろ
うか?」

「拒否します!」

「無駄

あれ何でだろ? 紺に背を向けて走り始めたはずなのに、景色が
変わらないぞ。

「離せ! 俺は死にたくない!」
「何を言っているのかな?」
「いやあああああああ!」

次の日の朝。

何とか生き残ることができたが、体中はボロボロ。そいつ中、包帯が巻かれていた。

「だ、大丈夫か、一樹？」

「大丈夫なわけあるか」

教室にいる俺は当たり前のように注目の的。

そりや突然、包帯まみれの奴が教室に入ってくるんだからな。

「昨日、何したんだ？ 知つてそんな籌に聞いても、何かに怯えていて教えてくれないしさ」

「それは俺が聞きだい」

いくら聞いても紺は教えてくれないし。今日だつて、一度も口を聞いていない。

逆に怒りたいけど、多分俺が悪いんだろう。多分。だから強く出ることができない。

そんなことを考えているとチャイムがなつた。

「席に付……どうした、織斑弟？」

入ってきた姉さんも山田先生も、俺の姿に驚いていた。姉さんでも驚くことあるんだな。

覚えておくことにしよう。

「階段から落ちました」

「そうか……」

嘘つてバレてるんだろうな。結構鋭いから。

「それではSHRを始める。山田先生、お願ひする」

「うーいや今日発表だつたな、クラス代表。

くくく。一夏、お前で決まりだあ！」

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繫がりで
いい感じですね！」

山田先生は嬉しそうだし、女子たちも盛り上がってる。いいことを
すると気持ちいいな。

「先生、質問です」

「はい、織斑くん」

「俺は昨日の試合に負けたんですが、何でクラス代表になつてるん
でしょ？？」

「それは――――」

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

上機嫌に立ち上がる女。何がそんなに嬉しいんだ？
お前も一夏に復讐したくて辞退したのか？

「まあ、勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは考えてみれば
当然のこと。なにせわたくしセシリア・オルコットが相手だったの
ですから。それは仕方のないことですわ」

ギリギリだつた奴がよく言つ。

「それで、ああ、わたくしも大人げなく怒つたことを反省しまして

したんだ。それで？

“一夏さん”にクラス代表を譲ることにしましたわ。やはり IIS 操縦には実践が何よりの糧。クラス代表ともなれば戦いには事欠きませんもの

「いやあ、セシリ亞分かつてんね！」

「そうだよねー。せつかく IIS が使える兄弟がいるんだし、お兄さんを持ち上げないと」

それには大いに賛成だ

「私たちは貴重な経験が積める。他のクラスの子に情報が売れる。一粒で一度おいしいね」

いや、商売はするな。

と、ここに一夏が最後の抵抗を見せた。

「じゃあ一樹は！？ こいつだって負けたよな！？」

「そうだな。だが、お前は勝てるのか？ 私の見立てではお前以上に IIS を扱えるぞ。それでこいつが勝つて、辞退してしまえば結果は今と変わらない」

「それは……」

「というわけだ。しかし、お前一人では厳しいこともあるかもしない。そこでだ、織斑兄。お前に補佐を一人決めさせてやろづ」

……は？ この人、何て言った。一夏の補佐を、一夏本人に決めさせると？ 何てことをいいやがんだ！

「なら、一樹を補佐にする」

「俺は断固拒否する！」

そんなんめんどくさい物なつてたまりますか！

「お前に拒否権はない。クラス代表の権限でお前を選んだんだ。そんな物があるわけがないだろ？」

「なつ！？」

「というわけでクラス代表は織斑一夏。その補佐は織斑一樹だ。異存はないな」

クラス全員が揃つて返事をする。

多分言い返しても、脅迫で有耶無耶にされんだろうな。
しようがない。また一夏と、

「組み手だな」

今のは眩しが聞こえたのか、俺の方を青ざめた顔で見てきたがスル
ー。

お前が俺を選ぶからいけないんだ。

そしてこれは余談だが、SHR後に俺は紬から謝罪された。

「ごめんね、一樹。昨日の勘違いだった

直後、本気の殺意が湧いた。でも、それは収めることとなる。

「でもね、一樹も悪いんだよ。それ分かってるよねえ？」

「はい……」

「分かってないようだつたら、『先祖様』と『対面するかもしれない
から……』

脳裏を駆け巡る昨日の惨劇。何故だろ？ 田に汗が……。

「じゃ、後でね」

「ああ」

紬を怒らせないよう、少なからずは努力しようと思つた俺だった。

怒つてた理由が分からなかつから、努力のしようもないんだけどな。

「ではこれよりISの飛行操縦を実践してもらひ

四月下旬。眠気を押し殺して、俺は鬼教官の授業を眞面目に受けていた。

ここで欠伸をしたら拳が飛んでくるんだろうな。

「織斑兄弟、オルコット、そして天草。試しに飛んでみせる」

訓練機を使つた実習はまだ先で、今の所は俺達専用機持ちが手本となつてゐる。

前々から気になつてたんだけど、一クラスに専用機持ちが四人つて、パワーバランスおかしくねえか？

いつ他のクラスから苦情が来てもおかしくないと、俺は思つぞ。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

熟練した操縦者と、ISを持つて一ヶ月も満たない素人を比べられても困るんだが。

ISはファットティングしたら、操縦者の体にアクセサリーの形状で待機してゐる。俺の場合は指輪だ。

「早くしろ」

へいへい。

俺は拳を突き出して集中する。色々と試したけど、これが一番集中できるんだよな。

起きろ、魔王。

そこからは早かった。待機状態の魔王から溢れ出した光の粒子は俺の体を包み込んだ。そして再構築。一瞬で俺の体は魔王に包まれていた。

一夏はIS『白式』を女はIS『ブルー・ティアーズ』を。そして紺は朱いIS『朱天』を纏つて浮いている。

この名前、絶対に暦さんが付けたよな。

「よし、飛べ」

紺とセシリ亞は急上昇。

俺と一夏も遅れて一人に続く。先に着いたのは俺。遅れて一夏も到着した。

「何をやっている。スペック上の出力では白式の出力方が上だぞ」

厳しい言葉が一夏のみにかけられる。まあ俺たちにも聞こえてるんだけどな。

今やつた急上昇と急下降。これは昨日教習つたばかりで、今日実戦。なのにかけられたのは、お叱りの言葉。流石は鬼軍……。

「誰が鬼軍曹だ？」

「何のことでしょうか？」

いや、今のおかしいだろ。

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を摸索する方が建設的でしてよ」

「そう言わてもなあ。大体、空を飛ぶ感覚 자체がまだあやふやなんだよ。なんで浮いてるんだ、これ？」

「それ言い始めたらキリがねえよ。それとも、ここにいつらの誰かに一

から説明してもらひつか？

「わたくしは説明しても構いませんが、長いですわよ。反重力力翼と流動波干涉の話になりますも」

「わかった。説明はしてくれなくていい」

「どうな。俺も聞きたくはないし。

「それよりも一樹。お前はどういうイメージでやつてんだ？」

「逃げたな。面倒なことを聞いて来やがつて。
で、イメージか。イメージ、ねえ……。

「特に何も。こんなもん感覚だ感覚」

「お前に聞いたのが間違いだつた」

「お前も感覚でやつてみろよ。案外、すんなり出来るかもしけねえぞ」

「そんなので成功するのは一樹だけだ（よ）」

「樹と紬がハモる。

「確かに模擬戦の時の『瞬時加速』も、感覚でやつて成功したとか……いつものことなんですね」

「そうだよ。いつも感覚でやつちやうから。だから一樹は例外だと思つて。一樹が普通だから」

「一樹の奴も頷いている。言わせておけば……。
」の場で地上に叩き落としてやるつか。

「一樹さん」

「ん？」

「一夏さん、よろしければまた放課後にしどりしてさしあげますわ。

そのときは「入りで……」

「一夏っ！ いつまでそんな所にいる！ 早く降りて！」

とんでもない大声が通信回線から響く。声は篠の物。耳が痛いんで叫ぶのはやめていただきたい。

何でこれだけいて一夏ばかりが怒られてんだ？

「織斑兄弟、オルコット、天草、急下降と完全停止をやつて見せろ。目標は地表から十センチだ」

「了解です。ではお先に」

すぐさまセシリアは地上に向かう。

「つまいもんだなあ」

問題なく一つの課題は成功したらしく。

「そりや俺たちよりも長い間使ってんだし、出来ねえとおかしいだ

ろ」

「確かに……」

「次は私が行くね」

紬も女と同じように急下降を始める。完全停止も成功し、残るは俺たちだけとなつた。

「……どうからやる？」

「せつからくだから賭けねえか？ 十センチより遠かつた方が飯を奢

る」

「いいぜ。負けないからな！」

「失敗して墜落でもつてしてろ」

一人同時に地面に向けて動き出す。

ギュンツー――――ズドオオンツ――

俺の隣を何かが通り過ぎた。

「は？」

一気に俺を追い抜いた一夏は、俺が言つた通り墜落しやがつた。俺、予知能力でもあんのかな？ ま、そんなことはないんだけど。地表より数メートル低い位置で、一夏はぶつ倒れている。そして俺は十三センチで完全停止。

この賭け、俺の勝ちだな。さて何を奢つてもりおつか。

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言つた。グラウンドに穴を開けてどひする」

「……すみません」

「……ひつひつ、どんなイメージで急下降したんだ？ すげえ気になる。

「情けないぞ、一夏。昨日私が教えてやつただよつ」

いや、笄さんや。あれは何を教えたんだ。
昨日の笄の説明はといふと

『ぐつ、とする感じだ』

『どんづ、と感覺だ』

『ずかーん、という具合だ』

と、俺も紬も啞然とする物だった。

あんな効果音だけの説明でいいなら、俺の説明でもできるんじやないか？」

「大体だな一夏、お前という奴は昔から…………」

「大丈夫ですか、一夏さん？ お怪我はなくて？」

「あ、ああ。大丈夫だけど……」

「そり。それは何よりですわ」

本当にあいつは、入学初日に絡んできた奴と同一人物か？ 完全に別人だろ。

隣にいる紺はある様子を、かなり楽しそうに眺めている。何が楽しいんだ？

「…………IISを装備していて怪我などするわけないだろ？…………」

「あら、篠ノ之さん。他人を気遣うのは当然のこと。それがIISをそろびしていても、ですわ。常識でしょ？」

相手が姉さんや一夏なら、絶対に心配はしない。
姉さんは心配する必要があるのか聞きたくなるし、一夏の場合は心配することがもつたいたいない。

「おい、馬鹿者共。邪魔だ。端っこでやつていい」

言い争っている二人を押し退けて、姉さんは一夏の前に立つ。

「織斑兄、武装を展開しろ。それくらいは自在にできるようになつただろ？」

「は、はあ」

武装か。一夏が羨ましいな。

俺の武装はフェンリルとガルムで、しかも両手両足用。思い浮かべるのが面倒なんだよな。

「なあ紬。お前の武装って何なんだ？」

「長刀。かなり長いから慣れるまで時間がかかるだけね」

「こいつに刀とか、もう何かダメだろ？。またボコボコされたりしてな……それは勘弁したい。」

「ま、ISが真っ白じゃなかつただけでもいいとしようか。そうじやなかつたら、俺は昨日のことを必ず思い出すことになつてだろ？。とこいつが、今思い出した。ヤバい、体が震えてる。」

「次、織斑弟と天草。展開してみる」

「了解」

「は、はい……」

「これもイメージか……。あの決闘の日から一夏や紬たちと、ほぼ毎日のようにアリーナ借りて練習してる。だから自分の装備の形状は、完璧に頭の中に入ってる。」

「それを俺の体に装備する……。」

俺の四肢に光が集まつて、フェンリルとガルムが姿を現した。

「織斑弟、お前も遅い。0・5秒で出せるようになれ」

「一秒以下で遅い……つか、あんたは何秒で出してたんだ？ それがあ一番気になる。」

「へいへい」

「返事は『はい』だ」

「はい」

0・5秒か……それより早く展開出来るよつててみるか。

気づけば姉さんは女に。いろいろと言われてるけど、俺にはもう関係ねえし。それよか今日の昼飯、何にするかな……。どうせ一夏の奢りだし、いつもより高いものでも食つか。

「ふうん、ここがそうなんだ……」

IS学園正面ゲート。そこにボストンバックを持った小柄な少女がいた。

「えーと、受付ってどこにあるんだっけ

上着のポケットから取り出したくしゃくしゃの紙。

それには地図は無く、書いてあるのは目的地の名前のみ。

「本校舎一階総合事務受付……って、だからそれどこにあんのよ

IS学園の敷地の大きさはかなりの物。ISを動かすためのアリーナが何個もあるのだからしじょうがないが、始めてきた人間には優しくない作りになつていてる

「自分で探せばいいんでしょう、探せばまあ

文句も言ひながらも彼女は歩き出す。

ちなみに彼女はなにも考えていない。何となく歩いていれば、勝手に着くだろう的な考え方である。

(誰かいないかな。生徒とか、先生とか、案内できそつな人)

キヨロキヨロと辺りを見て回るが、誰も見あたらない。

「だから……なんだよ……」

声が聞こえてきて視線をそちらにやると、夜で顔が見えないが女子が工Uの訓練施設から出てくる所だった。

(ちょうどこいや。場所聞こいつと)

声をかけようと小走りしようとしたときだった。

「んなわけねえだろ。それであの女との決闘も何とかなつてんだから

男の声が聞こえてきた。それも知っている人物の声。

この学園に行くことは知つていたが、初日に会えるとは思つてみなかつた彼女は緊張していた。

(久しぶりだけど、あたしつて分かるよね)

止めていた足を再び動かし始める。

「いつ――――」

「一樹、いい加減に感覚でやるの止めたほうがいいよ

「だからな、この感覚は今までの喧嘩の経験が元になつてんだ。バ

力にしてつと、ヤバいことになるぞ

「ヤバいことつて何?」

「…………あなた。んなことよりも、先に戻つて寝るわ」

「え、ひみつと、」飯は？

欠伸をしながら歩いていく男子を、女子が一緒に歩いていく。（今つて細よね……あの子も！」だったの。ていつか、先に戻つてゐつてどうこういとつ？）

彼女は自分の頭の中が、異常な速度で冷めていくのが分かつた。

「ええと、それじゃあ手続きは以上で終わりです。HIS学園へよつて」「いや、鳳鈴音さん

事務員の言葉よりも、今彼女の頭を占めるのはさつきの出来事。それ以外の」とはさづりでもよかつた。

「織斑一樹つて、何組ですか？」

「ああ、噂の兄弟の兄弟の弟さんの方？ 一組よ。鳳さんは一組だから、お隣ね。あの子のお兄さんがクラス代表になつたみたいで、補佐は弟さんのらしいわよ」

事務員の話を無視して鈴音は次の質問をする。

「一組のクラス代表つて、もつ決まつてますか？」

何故そんなことを聞くのだろうと困つた事務員だったが、それにもうやんと答える。

「決まつてゐわよ

「名前は？」

「え？ ええと……聞いていいあるの？」

そこでようやく鈴音の様子がおかしいことに気がついた。

「お願いをしようかと思つて。代表、あたしに譲つてつて――
額に血管マークを浮かべ笑顔で返す鈴音に、事務員の彼女は恐怖
を感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7520x/>

IS—騎士と魔王—

2011年11月20日09時01分発行